

プラトーフ『幸せなモスクワ』における 身体の部位の用例について

久保久子

アンドレイ・プラトーフの作品には、1920年代後半から1930年代にかけて、文体の面でかなりの変化が見られる。全体としては、描写が簡潔になり、文章がわかりやすくなったという印象を受ける。本論では、この時期のプラトーフの文体の変化の重要な一側面をなす、『幸せなモスクワ』における身体部位の用例について検討し、プラトーフという作家の本質に近づくための一歩としたい。

『幸せなモスクワ』は、近年プラトーフ研究において大きな注目を集めている。1996年にモスクワで開催された第3回プラトーフ国際学会は、対象をこの『幸せなモスクワ』のみに絞って行われたほどである。その席で複数の研究者から、この作品がプラトーフの文体の転換点にあたるのではないかと、いう指摘がなされた。

この作品は1932-36年の間に執筆されたと考えられている。主人公モスクワ・チェスノーヴァは孤児院育ちの娘で、さまざまな職業を体験し、さまざまな男と出会う。しかし決してひとりの男のものにはならず、事故で片足を失うような目に遭いながらも、自由な遍歴を続ける。この作品は、現在題名だけが残っている『レニングラードからモスクワへの旅』という作品の前半部として構想されたのではないかと考えられている。本論では、この『幸せなモスクワ』と、20年代後半に書かれた『チェヴェンゲール』、29-30年に書かれた『土台穴』の文体的特徴を分析することにより、20年代から30年代へかけての作家の文体の変化の傾向を探る。方法としては、テキストデータベースを利用した数量的比較を行う。¹

先にプラトーフの文体の変化について、大雑把な印象を述べたが、具体的には何がどう変わったのだろうか。これは非常に大きな研究テーマで、検討しなければならない問題は数多く存在する。ここではそれらのうち、最近発表されたH.スピリドノヴァの論文『アンドレイ・プラトーフの芸術世界における人物描写』で、プラトーフの20年代の作品の主人公には外見の詳細な記述がほとんどなく、30年代の主人公は詳しい外貌の特徴を持つ、と指摘され

プラトーフ『幸せなモスクワ』における身体部位の用例

ていることに着目したい。²

登場人物の外貌を形作っているのは、まず何より身体的特徴であろう。人間の身体がプラトーフにとって常に重要なテーマであることは、多くの研究者が指摘している。例えばC.セミョーノヴァは「プラトーフの身体に対する態度は驚くべきものだ。人間のただ一つの統一された構造物として、身体は神聖なものである」と述べている。³ こうしたことから、まずひとつの手がかりとして、主人公の外貌を形作る言葉、身体部位を表す単語の用法を検討してみたい。

表1:『チェヴェンゴール』『土台穴』『幸せなモスクワ』における身体各部の名称の使用頻度 (次頁)

表の各欄の上段は用例数、下段 () 内は10万語あたりの相対使用頻度。Засоринаの欄は Частотный словарь русского языка / Под ред. Л. Н. Засориной. М., 1977 での数値。⁴ (IV) の欄は Засорина のうち「文学的散文」分野での数値。使用テキスト: Платонов А. П. Чевенгур // Платонов А. П. Избр. М.: Московский рабочий, 1988; Платонов А. П. Котлован // Платонов А. П. Взыскание погибших. Повести. Рассказы. Пьеса. Статьи. М.: Школа-Пресс, 1995; Платонов А. П. Счастливая Москва // Новый мир. 1991, №9.⁵ 解析ソフト: Micro-ОСР (Oxford Concordance Program)

まず「лицо 顔」という単語を見よう。『幸せなモスクワ』におけるこの単語の頻度は、Засорина の「文学的散文」と比較してかなり高くなっている。「顔」は『土台穴』でもそれに近い頻度で使われており、人間の顔に注意を払っているという点で、この二作品は共通していると言えるかもしれない。しかしその注意の向け方にはかなりの違いがあるようだ。それは、顔の上に何があるか、という問題である。以下は、на + лице / лицах の前置格の使用例である。

『土台穴』

...на лице каждой пионерки осталась трудность немоги ранней жизни, скудость тела и красоты выраженья (К. 174).

一人一人のピオネール団員の顔に、幼い生命の衰弱という難儀と、身体の乏しさ、表情の美の乏しさが残っていた

...обозначили на детских лицах важную радость... (Там же.)

子供たちの顔におごそかな喜びをしるした

Сафронов сделал на своем лице определенное выражение превосходства... (К. 195)

サフロノフははっきりした優越の表情を顔に浮かべた

久保久子

表 1	«Чевенгур»	«Котлован»	«Счаст. Москва»	Засорина	(IV)
ВОЛОС	22 (19.1)	4 (11.5)	10 (34.6)	141 (13.3)	104 (38.8)
глаз	130 (113.7)	70 (200.7)	43 (148.9)	1093 (103.5)	552 (205.7)
голова	116 (100.7)	50 (143.4)	53 (183.6)	849 (80.4)	370 (137.9)
горло	22 (19.1)	3 (8.6)	3 (10.4)	47 (4.5)	19 (7.1)
грудь	35 (30.4)	14 (40.1)	25 (86.6)	120 (11.4)	67 (25.0)
живот	36 (31.1)	21 (60.2)	6 (20.8)	35 (3.3)	25 (9.3)
кожа	26 (22.6)	9 (25.8)	8 (27.7)	68 (6.4)	34 (12.7)
лицо	122 (105.9)	72 (206.4)	63 (218.2)	745 (70.5)	365 (139.0)
нога	123 (106.8)	30 (86.0)	34 (117.8)	496 (46.9)	242 (90.1)
нос	14 (12.2)	2 (5.7)	2 (6.9)	139 (13.2)	96 (35.8)
рот	43 (37.3)	33 (94.6)	10 (34.6)	109 (10.3)	69 (27.6)
рука	238 (205.8)	79 (226.5)	37 (128.2)	1596 (151.1)	610 (227.3)
спина	15 (13.0)	9 (25.8)	3 (10.4)	135 (12.8)	84 (31.3)
туловище	16 (13.9)	9 (25.8)	7 (24.2)	6 (0.6)	3 (1.2)
ухо	12 (10.4)	3 (8.6)	4 (13.9)	129 (12.2)	76 (28.3)
шея	29 (26.0)	5 (14.3)	1 (3.6)	92 (8.7)	46 (17.1)
果計	999 (866.4)	413 (1180.0)	309 (1065.5)	5790 (548.3)	2762 (1030.6)
総語数	115 千	35 千	29 千	1,056 千	268 千

プラトーフ『幸せなモスクワ』における身体の部位の用例

...на лице его получилась морщинистая мысль жалости к отсталому человеку (K. 204).

彼の顔に遅れた者への憐れみという皺だらけの思想があらわれた

...у него имелось выражение чуждости на лице (K. 233).

彼が顔によそよそしい表情を浮かべていた

Поп закрыл глаза и выразил на лице умильную любезность (K. 241).

司祭は目を閉じてへつらうような愛想よさを顔に表した

...он не видел разной мелочи на лицах людей... (K. 247)

彼は人の顔のあれこれこまかいものが見えなかった

『幸せなモスクワ』

...ветер начал сжигать кожу на ее лице... (M. 13)

風が彼女の顔の皮膚を焼き始めた

...на лице его лежали окоченелые рубцы миновавших войн... (M. 15)

彼の顔には過ぎ去りし戦いの固くなった傷痕があった

...одежда на вневойсковике была так же изношена, как кожа на его лице... (M. 16)

軍事教育中市民の衣服は彼の顔の皮膚と同じくらいすりきれていた

これを見ると、『土台穴』で「顔」の上にあるのは「幼い生命の衰弱という難儀と、身体の乏しさ、表情の美の乏しさ」「おごそかな喜び」「はっきりした優越の表情」「後進的な者への憐れみという皺だらけの思想」「よそよそしい表情」「へつらうような愛想よさ」「あれこれささいなもの」などで、まるで、境遇、感情、思考が、むきだしの形で顔の上にのっているように見える。一方『幸せなモスクワ』では、人の顔にあるのは「皮膚」とそれが固くなった傷痕だけである。

また『幸せなモスクワ』では、「голова 頭」という語の使用頻度が三作品中最も高くなっている。さらに「грудь 胸」という語の使用頻度も他の二作品の2倍以上である。一方「рука 手」の使用頻度は他の二作品の2分の1余りでしかない。

プラトーフの作品では、「手」は単なる身体の一部ではなく、象徴的な意味を持つことが多い。例えば1929年に書かれた『疑惑を抱いたマカール』の主人公マカールは「賢い手にからっぽの頭」と紹介されている。「手」は、「頭」に象徴される頭脳労働や知識人、官吏などに対抗する、労働者のシンボルとして現れ、同時に知識・理性に対立する直感・感性・心性などを象徴する。

ここで、各作品で登場人物たちがどのような手をしているかを見てみよう。以下は、三作品において「рука」とその変化形を定語または述語とする形容詞

久保久子

である（形動詞を含む。所有代名詞は除く。回数の書かれていないものは出現回数が1回である）。

«Чевенгур» (92)

левый (7), вооруженный (6), правый (5), большой (4), живой (2), ласковый (2), надежный (2), худой (2), чистый (2), бедняцкий, беспощадный, вражеский, голый, горячий, грубый, грязный, губительный, дернутый, длинный, досадный, дрожащий, женский, жилистый, здоровый, изувеченный, испорченный, кровавый, лихорадочный, любовный, маленький, мягкий, надлежащий, налитый, недобрый, неписчий, несмелый, неуверенный, обвисший, обездоленный, обнимавший, обширный, опытный, отрекающийся, отросший, поднятый, породистый, постовой, потный, привыкший, протянутый, пшеничный, работающий, рабочий, раскинутый, расставленный, розовый, свалившийся, свойский, советский, способный, старый, суковатый, сухой, счастливый, теплый, угнетенный, ухватистый, человеческий, честный, чистоплотный

«Котлован» (18)

великий, верный, второй, горячий, длинный, другой, железный, занемогший, левый, молящийся, негромкий, отвыкший, охладевший, равнодушный, развитый, терпеливый, тонкий, трудящийся

«Счастливая Москва» (9)

большой (2), годный, левый, лежавший, опущенный, отросший, полный, твердый

一見して、『チェヴェンгур』における「手」の形容が非常に多彩であることがわかる。また『チェヴェンгур』の「手」には「善良でない」「抑圧された」「誠実な」といった性質が与えられている。本来精神を持たないものに精神的な性質を表す形容詞がつくことが多いのは、プラトーフ作品全体に共通する性質であり、特に「手」に限らない。しかし『チェヴェンгур』と『幸せなモスクワ』を比べてみた場合、『幸せなモスクワ』の「手」は精神性に欠けており、あくまでも肉体の一部であると言える。

また『チェヴェンгур』では手のやわらかさ、あたたかさは生命力を象徴している。主人公のアレクサンドルや処刑されるザヴィン＝ドヴァイロは、いずれも自分を殺そうとする者の手を求め、また虐げられた暮らして思考能力が死んでしまった農夫プロホル・アブラーモヴィチは、子供たちの手を感じることによってのみ人生を続けている。⁶ 一方『幸せなモスクワ』では、「ぎっちり圧縮された乏しい感情のタンク」(M. 27) という表現があるのみだ。

「手」の他に『幸せなモスクワ』で使用回数の多い「頭」と「胸」は、いず

プラトーフ『幸せなモスクワ』における身体の部位の用例

れも登場人物の一人、外科医のサムビーキンが手術を施している箇所である。「頭」は知性の宿るところだが、サムビーキンの患者は脳腫瘍であり、「頭」という言葉は膿や細菌のイメージをとמונאう。サムビーキンは次のような理論を持っている。

これまで、脊髄はただ心臓や純粹に生物的機能のためだけに働き、脳髄は最高位の調整をする中心だという考えが定着していた……それは間違いだ。脊髄は考えることができるし、脳髄は最も単純な、本能的プロセスに関係している…… (M. 32)

『幸せなモスクワ』では「頭」の持つ指導的な役割に疑いが持たれているのだ。

一方、「胸」は心臓のあるところとして現れる。それはサムビーキンの研究とは関係ないところでも同様である。以下は『幸せなモスクワ』で、「грудь 胸」が前後 100 語以内にある「сердце 心臓・心」の用例である。

...от наблюдения облаков и пространства в груди Москвы начиналось сердцебиение... (M. 10)

雲と空間を見ていると、モスクワの胸で心臓の激しい鼓動が始まった……

...Божко слышал биение сердца Москвы Ивановны в ее большой груди... (M. 12)

ボシコはモスクワ・イヴァノヴナ [チェスノヴァ] の大きな胸に心臓の鼓動を聞いていた……

...поблекла от слабости своего сердца, сжавшегося сейчас в ее груди... (M. 29)

心臓に力がなく彼女は青ざめた。心臓は今や彼女の胸で締めつけられ……

...ночь шла утомительно, как однообразный стук сердца в несчастной груди (M. 39).

夜は不幸な胸にある心臓の単調な鼓動のようにだらだらと過ぎて行った。

心臓が胸にあるのは当然だが、それが繰り返し明記されることには意味があると思われる。心臓に関して、サムビーキンは次のような理論を持っている。

死は、身体を駆け抜ける際に、予備の圧縮された生命の封印を解き、その生命は最後に的を外れた射撃のように人間の中で響き渡り、人間の死んだ心臓に不明瞭な跡を残していく……だがこの物質は、エネルギーの点で最も高価で貴重なものだ (M. 33)。

サムビーキンは死んだ子供の心臓からこの物質、「予備の圧縮生命」を取り出し、炭鉱事故で重症をおったモスクワに注射する。彼は作品の中で三度、死体の胸を開いて心臓を取り出している。

久保久子

この「сердце 心臓／心」という単語の使用回数は、Засорина の「文学的散文」で116回（相対頻度 43.2）、これに対しプラトノフの三作品では、『チェヴェンゴール』が95回（82.5）、『土台穴』27回（77.4）、『幸せなモスクワ』90回（310.3）である。三作品とも「сердце」の使用頻度はかなり高く、プラトノフの作品世界でこの単語が重要な位置を占めていることがわかる。それにしても『幸せなモスクワ』の数字は突出している。

「予備の圧縮生命」なるものを取り出される『幸せなモスクワ』の「сердце」は、『チェヴェンゴール』の「рука」に代わる生命力のシンボルの役割を持つと思われる。また『幸せなモスクワ』の「сердце」は「ум 知性」の対立項にもなっている。「心」が知性に対立するのはごくあたりまえのことだが、それがこの作品では心臓の外科手術に直接結びつく。

二日目の夜サムビーキンは死んだ子供の心臓（сердце）と首のリンパ腺を摘出し、それから秘密の懸濁液をつくってチェスノヴァ [主人公モスクワ] に注射した。彼は今やほとんど眠れなかったので、夜明けまで町をさ迷い歩き、朝には病院で死んだ少年の母親を迎えた——息子を葬るために引き取りに来たのだった。サムビーキンは母親と共に出かけ、必要なことをあれこれ手伝ってやり、昼過ぎには馬車の後ろを、震えている痩せこけた女と並んで歩いていた。馬車には空っぽの胸をした少年が柩に横たわっていた。これまで知らなかった、奇妙な人生が彼の前に開けた——悲しみと心（сердце）、思い出の人生、慰めと愛するものを必要とする人生である。この人生は、知性（ум）と熱心な仕事の人生と同じように偉大だったが、もっと静かなものだった（M. 43）。

死んだ少年の「сердце」によって、「知性と熱心な仕事の人生」しか知らなかったサムビーキンに「сердце」の人生が開ける。サムビーキンのとまどいは、「空っぽの胸」として、比喩ではなく心臓を摘出されて文字通り空になった少年の胸部として現れる。

サムビーキンは心臓から「予備の圧縮生命」を取り出すほか、人間の魂がどこにあるのかを人体解剖によって明らかにする。彼によれば、それは腸の中の、消化中の食物と大便の間にある。しかしこの理論は後に別の登場人物によって否定されることになる。

ここで興味深いのが、やはり頻度の高い「нога 足」について主人公のモスクワが言った、「私は足じゃない」という言葉である。

「まあいいわ」。モスクワはあいまいに微笑んだ。「私の足を見せて」「ありません。

プラトーフ『幸せなモスクワ』における身体の部位の用例

僕は自宅へ送るよう命じました」「どうして？ 私は足じゃないのに……」「じゃあ、誰なんですか？」「私は足じゃない、私は胸じゃない、私は腹じゃない、私は目じゃない——自分でも誰だかわからないわ……」(M. 43)

これはモスクワが事故で重傷を負い、当直医であったサムビーキンが彼女の片足を切り落としてからのエピソードだ。モスクワのセリフにならって、これまで見てきた単語を整理するとこうなる。「顔には皮膚しかないから私は顔じゃない。手に心はないから私は手じゃない。頭が私だと思っている人は間違っている」。すると残されたのは生命の象徴となった「сердце」だ。

登場人物の一人、機械技師だったサルトリウスはモスクワへの想いに苦しみ、目をわずらったあと名前をグルニャーヒンと変える。彼は作品の最後で子持ちの未亡人と結婚するが、それは次のような理由による。

さもなくば彼の貪欲で軽薄な сердце はすぐさま擦り減って、さまざまな女性や友人への実りのない執着の中で、この地上によくある、あらゆる華美の澱へ飛び込もうとする危険な熱意の中で滅びてしまうだろう (M. 58)。

技師としての名声も、自分の名前さえも捨ててしまったグルニャーヒンは、たったひとつ сердце だけを自分のものと認識している。この一見平凡な境地へ至るまでに、『幸せなモスクワ』という作品は、身体各部にほとんど解剖学的な興味を向け、余計なものを切り落としてきたと言える。

その背景を考えてみると——この作品の書かれた1930年代は旧ロシア文学の宗教・観念論的原理が徹底して攻撃された時期だった。34年には第1回全ソビエト作家大会で「社会主義リアリズム」がソビエト文学の公式の指針として確認された。プラトーフの永遠のテーマである、真実とは何か、幸福とは何かという問題は、すべて回答がでたことになってしまった。答えのある問題にもう一度とりくもうとした結果が、魂の探求を死体の解剖から始める『幸せなモスクワ』という作品ではないだろうか。

先に述べたように、この作品にはこの後に後半部が予定されていた。「予備の圧縮生命」という科学的論拠までついてただひとつ残った сердце が、これから試練を受けるはずだったのかもしれない。『チェヴェングール』のザハール・パヴロヴィチによれば、本当のポリシェヴィキは「пустое сердце」(からっぽの сердце)を持たなければならないからだ。⁷

もちろん見つかっていない後半部について論じることはできない。しかし

久保久子

『幸せなモスクワ』という作品が、形而上学的な問いを、より具体的な、目に見える形で展開し、表現しようとしていることは間違いないと思われる。そしてこの流れが、確実にこの後の作品に受け継がれている。H. スカロンは成熟期のプラトーフの文体を説明するのに、「日常的経験の復権」という言葉を使っているが、この言葉は今回の分析にもそのまま当てはまる。⁸

プラトーフの文体が変わってきたのは、プーシキンに学んだものだという見解がある。⁹ これはプラトーフが1937年の論文『プーシキンはわれらが同志』で、これまで傾倒していたゴーゴリやサルトル・ウイコフ＝シチェドリンに否定的な態度を見せているためだ。¹⁰ また、文壇の状況や、プラトーフ個人に対する攻撃のためだという考えもある。¹¹ 確かにプラトーフは、同じ37年の論文『弁明なき反論』で、的外れの非難に反論しながらも、過去の自分が文学的に誤りをおかしたことを認めている。¹²

しかし具体性への志向は、実はプラトーフの最も初期の段階から一貫した姿勢だった。1922年に書かれた『プロレタリア文芸』という社会時評の冒頭に、次のような一節がある。「我々は歴史というものを、抽象的なものから具体的なものへ、抽象的なものから現実へ、形而上学から物理学へ、カオスから組織への道と見ている」。¹³ プラトーフの創作活動は常に、この「抽象的なものから具体的なものへ」という方向へ動いている。

革命当時のプラトーフは、創造的社会性、世界改造、集団主義、科学技術といったものに熱中し、数多くの社会時評や論文を書いてこれらを唱導しようとした。しかしその内容はむしろ夢想に近いものだった。その後小説を書くことによって、特に1925年頃からプロットを組み立てるような小説を書き始めて、プラトーフは「具体的なもの」への道を歩き始める。T. ランゲラークが指摘するように、プラトーフが20年代初期に書いたSF小説は、時間も場所もはっきりせず、ただ世界改造という目的を持った超人のような登場人物たちがいるだけだった。やがてそれぞれの要素が具体性を持つようになり、しかも幻想性を失わない、プラトーフの独自の世界が形成されていった。¹⁴

先ほどの『プロレタリア文芸』の中には、次のような一節もある。「いったい真実とは、抽象的な概念なのだろうか。否。今や人類の膨大な大衆が真実を欲し、私の身体すべてが真実を欲している。そして身体が欲するものは、非物質的な、精神的な、抽象的なものではありえない。真実とは現実的なものである」。¹⁵ さきほどの、顔の上に何があるかという例にも、抽象的な概念に身体を与えようとするプラトーフの意図を読み取ることができるだろう。『土台

プラトーフ『幸せなモスクワ』における身体の部位の用例

穴』では概念をそのまま人の顔の上にのせていたのが、『幸せなモスクワ』では別の描き方を試みていると言える。

30年代のプラトーフにみられる変化も、同じように、「抽象的なものから具体的なものへ」という道にそって行われたものと言えるだろう。30年代の主人公が詳しい外貌の特徴を持つというスピリドノヴァの指摘も、作者が観念的な思考から一人一人の人間へ視線を移していることを意味する。そしてそれは特定の作家の影響や、激烈な反プラトーフ・キャンペーンの結果というよりは、作家の内在的な変化・あるいは成長ではないかと思われる。『幸せなモスクワ』で哲学的な思索を身体の解剖に置き換えたことも、決して体制に対する敗北ではなかったのである。

(くぼ ひさこ・北海道大学)

* 本稿は平成10年度科学研究費補助金による共同研究「18-20世紀ロシア小説の文体の計量的総合的比較研究」(研究代表者: 灰谷慶三。課題番号: 10410106)の成果の一部である。

注

- ¹ 『チェヴェンゴール』『土台穴』については以下を参照。安藤厚・久保久子「A. プラトーフの作品における身体部位の用例(『チェヴェンゴール』『土台穴』『幸せなモスクワ』)」、『北海道大学文学部紀要』47.3(1998): 73-88; Кубо Хисако. Тело как метафора: Вычислительно-сравнительные исследования повести «Котлован» и романа «Чевенгур» // Japanese Slavic and East European Studies. Vol.19. 1998. P.113-122.
- ² Спиридонова И. А. Портрет в художественном мире Андрея Платонова // Русская литература. 1997. №4. С.170-183.
- ³ Семенова С. Мытарства идеала // Новый мир. 1988. №5. С.221.
- ⁴ この辞典の刊行は今回扱う作品が書かれてから40年以上経ってからだが、辞典のために収集されたサンプルの執筆年代はプラトーフの活動時期とほぼかさなっており、比較対照に十分なり得ると考える。
- ⁵ 『チェヴェンゴール』『土台穴』の2作品については、島田陽氏によってテキストデータ化されたものを利用させていただいた。『幸せなモスクワ』は久保がデータ化した。島田氏はMicro-OCPによってすでに『チェヴェンゴール』のコンコーダンスを作成している(Симада Йо и Урай Ясуо. Конкорданс «Чевенгур». 3 vols. Tokyo International University, 1996)。論文中の引用は上記のテキストにより、『土台穴』からの引用は(K. 00)、『幸せなモスクワ』からの引用は(M. 00)と表記する。『土台穴』の訳出にあたっては、アンドレイ・プラトーフ『土台穴』亀山郁夫訳、国書刊

久保久子

行会, 1997 を参照した。

- ⁶ Платонов А. П. Чевенгур // Платонов А. П. Избр. С.40, 104, 230.
- ⁷ Там же. С.77.
- ⁸ Скалон Н. Р. Предмет в художественном мире А. Платонова // Творчество писателя и литературный процесс: Жанрово-стилевые проблемы / Межвузовский сборник научных трудов. Иваново, 1987. С.73.
- ⁹ Чалмаев В. Творческий путь и художественное новаторство Андрея Платонова // Русская литература XX века: В 2 частях. Часть 2. М.: Просвещение, 1996. С.20-55.
- ¹⁰ Платонов А. П. Пушкин — наш товарищ // Платонов А. П. Взыскание погибших. С.615.
- ¹¹ Евдокимов А. Статья «Пушкин — наш товарищ» в контексте советской критики 1937 года // «Страна философов» Андрея Платонова: Проблемы творчества. Вып. 2. М.: Наследие, 1995. С.263.
- ¹² Платонов А. П. Возрождение без самозащиты // Андрей Платонов: Воспоминания современников: Материалы к биографии. Сборник. М.: Современный писатель, 1994.
- ¹³ Платонов А. П. Пролетарская поэзия // Платонов А. П. Возвращение. М.: Молодая гвардия, 1989. С.44.
- ¹⁴ Лангераг, Томас. Андрей Платонов: Материалы для биографии 1899-1929 гг. Амстердам: Пегасус, 1995. С.137-141.
- ¹⁵ Платонов А. П. Пролетарская поэзия. С.46.

Hisako KUBO

Andrei Platonov's Usage of Body Parts: *Happy Moscow*

In the 1920s and 1930s, Platonov's style changed dramatically. To study this change, the novel *Happy Moscow* was selected, analyzed, and compared to his works *Chevengur*, and *The Foundation Pit*. On the basis of Spiridonova's view that the characters in Platonov's prose in the 1920s are described vaguely, while those in the 1930s have their own distinct features, the main goal of this paper is to highlight the changes in Platonov's prose using a textual database focusing on descriptions of body parts.

As the results demonstrate, the relative frequency of the word "face" (litso) in *Happy Moscow* is higher than the average for the "literary works" of that time (cf. *Russian Dictionary of Frequency*, edited by L. N. Zazorina). Its frequency is similar to that in *The Foundation Pit*, although the usage of this word in the two works is very

プラトノフ『幸せなモスクワ』における身体の部位の用例

different. In *Happy Moscow*, there is nothing but “skin” (kozha) on the “face.” The frequency of the word “chest” (grud’) is two times higher than in other works, while in contrast, the word “hand” (ruka) is used half as much as in other works. Examples of how the word “chest” is used show that in *Happy Moscow* the author emphasizes the chest as the place where the heart exists. In this prose the word “heart” (serdtse) has the same symbolic meaning that the word “hand” has in *Chevengur* and *The Foundation Pit* — it symbolizes emotion, intention, life and so on.

From this analysis, we can see in *Happy Moscow* the author’s intention to “dissect” a human body. To solve the problems “Who is me?” “What is my essence?,” each body part is tested and investigated. All words that are used with a high frequency, i.e. the objects of the author’s thinking, are disgraced as the story progresses, and in the end, the word “heart” has yet to declare itself a human essence. The second half of *Happy Moscow* is missing, so it is possible that the word “heart” was given a final examination there.

In 1934, at the First Congress of the Writers’ Union, “socialist realism” acquired a canonical formulation. All problems were solved or supposed to have been solved. And it became impossible even to ask the question “Who is me?” To ask this question, Platonov started his inquiry with dissection, searching for the existence of the human soul in the human body. It was not a defeat for him, but a maintenance of his principle of writing philosophical thoughts in a concrete way.